比較政策研究

大慶油田と大慶油田有限公司での現地調査について

国際学研究科　陳懐宇

2010 年 10 月 19 日

1、 大慶油田と大慶油田有限公司について

夏休みの時間を利用して地元の油田（大慶油田）で現地調査を行った。大慶油田とは、中華人民共和国黒竜江省に存在する油田である。命名は地名からではなく、油田が建国 10 周年で発見されたということである。100km 四方に広がる中国屈指の大油田であり、油田の開発は、第二次世界大戦後輸入に頼っていた中国の石油事情を一変させた。2000 年前後から原油生産は減退傾向にあり、天然ガスの生産にシフトしつつある。大慶油田は、中国石油・天然ガス総公司傘下の大慶油田股份有限公司に所属している。中国東北の大慶市にして同市を中心とした油田の総称であり、大慶長垣と呼ばれる主要油田群と周辺の小油田とガス田からなっている。石油探鉱は建国初期の 1950 年代に旧ソ連の技術導入・技術協力の下で開始された。本格的な開発は 1960 年代中国社会主義の「人海・攻略方式」によって開始された。[i]

大慶油田股份有限公司は中国石油天然ガス総公司の傘下の中堅企業であり、主要に石油天然ガスの探鉱・開発、石油化学工業、設備の製造、生産の保障などの業務に従事している。大慶油田股份有限公司は五十六の二級会社からなっている。資産総額は 2072 億元。2000 年末で大慶油田における原油の確認推定埋蔵量は約 56 億 2000 万トン、すでに開発された油田の数は 26 個、開発対象の推定埋蔵量は約 48 億トンである。原油の確認推定埋蔵量のうち、周辺油田の分は約 12 億 7000 万トンで、開発対象は約 3 億 8000 万トン、未開発は約 8 億 3000 万トンとなっている。大慶油田では開発初期から「水攻法」が採用されたが、1980 年後半に入り、大慶油田は生産の最盛期を過ぎて、生産原油の含水率が増加してきた。1980 年後半、「分層注水・分層開発」という開発の方式を採用した。しかし、「分層注水・分層開発」という方式は油水分布状況の把握も難しいである、油と水の分離に対して技術的な制約がある。こうして、1990 年代初期から、大慶油田は外国技術・整備の導入を通して EOR（Enhanced oil recovery）プロジェクトを実施してきた。五十年間にわたって、十九億トン以上の原油を生産し、二十七年連続して 5000 万トン以上の生産量を維持した。1990 年代末には油田の生産方針が大きく転換され、従来の単純な生産量重視から収益中心に転換され、市場経済体制に適応するための「高水準生産、高収益、持続可能な発展」の目標を目指している。[ii]

2、大慶油田有限公司の海外進出の展開について

1990年代以来、中国は経済グローバル化の下で、中国経済の持続した高度成長に伴い、WTO（世界貿易機関）加盟に伴い、国内市場の開放と企業の海外進出を加速している。また、中国の国内の石油需給の増加により、石油供給の対外依存度がますます高まっている。こうした中、大慶油田有限公司は中国石油天然ガス総公司の傘下の中堅企業として、どのように海外へ進出・展開してきたのか、また、その海外展開の背景・方式及び問題点はどのようなものであったかという問題に関心を持っている。今回の発表は大慶油田有限公司を中心に中国の石油事業の海外進出が、どのように展開しているかを検討する。

中国石油産業の海外進出は、主として石油上流部門における海外の石油探査・開発分野へ進出である。中国石油事業の海外展開は、1990 年代に入り、中国の海外直接投資の拡大に伴い、1992 年から行われ始めた。郭四志によると、中国石油産業の海外進出は以下の二つの段階に分けられた。第一段階は 1992 年から 1995 年までは、比較的規模の小さい海外プロジェクトに調印し、海外石油資源の探査・開発を試み、技術や経営管理人材を養成し、国際経営資源を蓄積し始めた段階である。第二段階は1990年代後半から今までは、海外石油探査・開発により速やかに参入し、適正規模の国際生産を形成し、また投資リスクのよい低い良好な収益効果を期待し、石油・天然ガス資源を確保できる比較的大型なプロジェクトを実施し、海外油田の開発権益を積極的に取り組んでいる。[iii]中国国務院が国家『第10 次 5 ヵ年計画』によれば、中国石油事業の海外進出の方針・戦略は、主として以下のように示している。つまり、中国の海外資源を利用する基本方針は平等互恵精神を踏まえ、積極的に産油国と協力し、石油・天然ガスの探査・開発の分野に進出して石油・天然ガスに関する工事・用役も請け合い、積極的に海外事業を展開し、安定した海外石油資源を獲得し、国の石油の長期安定供給を確保することである。[iv]

大慶油田は五十年間にわたって、十九億トン以上の原油を生産し、二十七年連続して 5000 万トン以上の生産量を維持したという業績を創造した後、注目される第二次創業を始めた。『大慶油田有限公司第二次創業指導綱要』によれば、国際化運営を実施する大手の石油会社を作るという目標と海外進出を実施する戦略を示している。今まで大慶油田有限公司は 28 ヵ国で海外業務があり、海外の累積収入が 45 億元を超え、2500 以上のスタッフが海外で石油事業をやっている。[v]

2010年9月1日大慶油田有限公司の国際工程部の孫学継エンジニアにインタビューを行った。この人は大慶油田有限公司がモンゴル国で石油事業の状況をよくわかっている。僕は大慶油田有限公司がモンゴル国で石油事業の進展の状況と将来及び問題点について孫さんにインタビューを行った。以下は今回のインタビューの内容をまとめたものである。

まずモンゴル国の石油開発の歴史背景と大慶油田有限公司がモンゴル国に進入する方式について紹介する。歴史的にはソ連とモンゴルによる探査にはじまり，さらにモンゴル南東部で 1941 年から 1969 年にかけて石油採掘が行われた。この間に石油精製施設も整備された．その後火災などがありモンゴルでは石油の生産はしばらく無かった．1990 年代中ごろから西側諸国による探査と開発がはじまった。たとえば2005年までモンゴル東部ではイ

ギリスのSoco InterNationalという会社が採掘権を得ていた。大慶油田有限公司は、2005年､イギリスのSoco InterNationalが保有するモンゴル油田の権益を買収して大慶Tamtsag公司という子会社を成立した。この子会社はモンゴルTamtsag油田におけるSocoの85%の権益を取得した。孫さんはこの子会社を成立することは大慶油田有限公司がモンゴル国に石油工程サービスを提供することに対して便利な条件を作った。このような買収の参入方式を採用し、速やかに海外石油開発の権益を確保でき、企業の収益性、埋蔵量及び生産量を増大できると言った

大慶油田有限公司がモンゴルでの将来について孫さんに聞きた。孫さんによれば、大慶Tamtsag 公司を成立することは大慶油田有限公司がモンゴル国で石油サービス市場の権益を確保に対して深い意義がある。この子会社を成立してから、石油開発、市場調査などの仕事を展開している。五年間にわたって会社の国際運営、人事管理などの分野でたくさんの経験を蓄積した。モンゴルの政治と経済の状況、風俗習慣、文化歴史などの領域の認識に対して大きな進歩を取った。でも、民族主義の問題は大慶油田有限公司がモンゴルでの油田開発に対してたくさんの良くない影響がある。孫さんは、大慶油田有限公司はTamtsag油田の 70%以上の株式を持っている。このことに対してモンゴル人は中国の会社が自分の国の石油資源を占めているという認識がある。もし以後 Tamtsag 油田の原油の生産量は多くなって多くの原油は中国に運ばれていったら、これはモンゴル人の極端の行為を引き起こせるかもしれない。極端の行為と言えば、たとえば、モンゴル国の政府は大慶油田の持ち株を没収することである。または、モンゴル人は環境の保護を非常に重視している。しかし、大慶油田有限公司がモンゴルでのプロジェクトは時間が長くて規模が大きいである。もし環境に対しての影響を控えないと、モンゴル人の不満を増やせると言った。または、モンゴルでのある中国人スタッフたちは素養が低いので、モンゴル人をいじめるケースも多いである。以上の問題を解決しないと、モンゴル人が中国の会社に対しての不満は大慶油田有限公司がモンゴルでの投資安全を脅かせると思う。

これから、以上の問題の解決に対して自分の意見を述べる。取りあえず、大慶油田有限公司は Tamtsag 油田に対しての持ち株を意識的に減らすべきだと思う。モンゴルの石油産業に対して直接の投資ではなくて技術と労働力及び販売などの分野で石油サービスの提供を中心にモンゴルの油田開発を介入するほうがいいと思う。　たとえば、日本の石油会社が海外石油資源の開発の成功のケースから見ると、これらの会社は大体海外油田の 5%~7.5%の株式を持っている。[vi]少ない持ち株の優勢は進退が思いのままであることだけなくて産油国の市民からの敵視を避けられると思う。もしモンゴルで開発された原油はモンゴルで精製したら、運送の危険を避けることだけではなくて、モンゴル人の不満を減らせると思う。環境問題に対して、大慶油田有限公司が自分の開発過程で環境に対しての破壊を減らすことだけではなくてモンゴルの環境保護活動を積極的に参加することはモンゴル人が環境問題に対しての心配を減らせると思う。海外会社のスタッフを雇うことについて、大慶油田有限公司は技術と管理の人員だけモンゴルに派遣し、モンゴル人は労働者として働

かせるほうがいいと思う。このように実施したら、人件費のコストを減らせることだけではなくて、モンゴルの就職問題を解決できると思う。これは海外会社とモンゴル国の政府の友好関係を築けると思う。または海外プロジェクトは国内プロジェクトより不確定的な要素が多いので、技術と管理の人員の選択はとても重要だと思う。中国人のスタッフは民族平等に基づいてモンゴル人のスタッフを尊敬すべきだと思う。または、孫さんによれば、今までモンゴルは石油開発と石油精製の専門家がいないである。だから、大慶油田有限公司はモンゴルで専門家の育成という役割を果たせたら、これは会社のモンゴルでの長期の利益と両国の友好に深い意義があると思う。

---

[i] 李　懂章　『大庆油田大事记』　黑龙江人民出版社 2006 年

[ii]中国石油大慶油田ホームページ http://www.cnpc.com.cn/dq/（2010 年 8 月 25 日）

[iii]郭四志　『中国石油メジャー』2006 年　文真堂　p 265

[iv]中国政府ホームページ http://www.cec.gov.cn/info/zt/20030508/lan1_5.htm（2010 年 8 月 25 日）

[v]中国石油大慶油田ホームページ http://www.cnpc.com.cn/dq/（2010 年 8 月 25 日）

[vi] 劉軍紅　「学学日本如何投资海外资源」环球时报 2010 年 8 月 24 日